

社会性に乏しく孤立している生徒への援助

市川 富美子*

この報告は、社会性に乏しく孤立している生徒Mに、養護教諭としての立場で相談を実施し、Mが自己実現できるよう援助した実践の記録である。援助の仕方は不十分なながらもMは次第に学級にとけ込み、集団に適應できるようになってきている。

I はじめに

学級の中で孤立しており疎外されているMと接し、相談援助することにより、Mの自覚を促し、少しでも自分の気持が表現できるようになることを期待する。

Mとの出会いは、私が就学指導委員会に属し、MにWISC知能診断検査を実施したことから始まる。Mの程度の生徒はどここの学級でも少数ながらいることだろうが、自発的にMが私を選んで来たという出合いを大事にし、Mの学校生活を楽しいものにしてやりたいと思う。

II 生徒の状況

1 対象 M 中学3年生 女子

2 問題の概要

(1) 家庭環境

父 飲食店経営

母 家業の手伝い 病気がち

姉 家業の手伝い

姉 美容師見習いの修業を中断し、家業の手伝い

兄 大工見習い、県外へ就職

本人(M)

母親は心臓疾患のため、Mが中学1年生のとき病院へ入院したり退院したりのくり返しのため、家業の飲食店は姉二人と叔母でやっている。母が入院しているので父は病院へ看病に付添っているため仕事ができない。Mは夕方店の忙がしい時間は手伝っており、この時間が楽しそうである。学校での不満も、この時間に長姉にうちあけることが多い。

(2) 学校生活でみられる本人の状況

- 授業中は全く発言なく、指名されても小声で返事をするだけ。

* 加茂市立若宮中学校

間は自習となり学習プリントを配った。しかしMの連絡の仕方の不明瞭さから自習する際に不都合なことが起こり、クラスのほとんどがMを責めたという。Mの仕事分担における行動を考えさせる。Mはプリントを配るときにやり方をみんなによくわかるように連絡しないので悪かったという。反省しながらも、まだ第三者に対してモヤモヤした気持が残っているように感じられた。学級担任に小集団の中でMのリードをしてくれる生徒の考慮を促した。担任も本校へ転任して初めて持つクラスなので、まだ個々にまで目が届いていなく、もちろんMともじっくり話したことはないという。

第6回(7月〇日)

T:その後どうですか。

C:隣に並んでいるI君が私に話しかけてくれるんです。消しゴム貸せ……なんてね。

(うーん) 私とってもうれしくてね。

T:よかったね。

C:でも〇〇さんたちは、やっぱり私をバカにして乱暴なことをいうんです。(ハアハア)

T:乱暴なことって……。

C:M子の顔は変な顔だとか、そうするとみんな笑ったりして(うん)……やっぱり大抵の人は私を嫌っているんです。

T:きらってねえ。そうかなあ。きらわれているなんて思いたくないわね。

— 沈黙 —

C:……勉強中は私はあんまりしゃべらないから班の人たちは、M子なんかいたって何にもなんねや。なんていうんです。

T:うーん、M子さんはグループのみんなが話し合ったりするときもだまっているのね。

C:……たいてい……宿題のことなんか話しているから。

T:宿題のことをね。M子さんだって宿題はちゃんとやってくるんでしょ?

C:……はい、あんまりしないけど……(ウウン)でも少しはね。わかるところだけやってくることもあります。

T:そのわかるところだけ、そこをみんなと話をするようにしてみたら?

学習の能力的な面で長いこと置きざりにされて来て、ある意味ではあきらめのような形で過ごして来ているのではないかと感じられた。ずい分長いこと欲求不満を持ちつつ生活して来たMに理解や受容という態度で接する場が与えられるだろうかと思うとあせってしまう。

第7回(7月〇日)

「〇〇さん達や〇〇君が変なことばかり云っていじめるから、私も少し言い返したんです。そしたら、M変ったや、きっかね(きかん坊に)なったなんていうんです。」と、いじめられ放してはいけない気持ちと、きかん坊になったなと仲間から反応されたことに対して、消極的な気持ちは感じられない。

クラスの女の生徒3,4人にMとの仲間づくりの協力を求めると同時にMに対する反応をみてみた。Mはクラスにいてほとんど話もしないから、たいていの生徒は仲間になりたがらない。しかし、リーダー格の生徒たちが、必要に応じてめんどうをみている。

第8回(9月〇日)

夏休み中の全校召集日、学年召集日に欠席しているので話を聞いてみた。

T：召集日にはみんなお休みしているようだけ
ど……。

C：はい、お母さんが入院して手術するので病
院へ看病に行ったりして……。

T：そお、お母さんの看病のためにね（はい）

C：私が登校日に一回も来なかったもんだから
みんなが、M子ずる休みして、なんていう
んです。でも私はずる休みでなんかいいん
です。

T：そうね。ずる休みではないね。ずる休みで
ないということをみんなからわかってもら
わなければね。

C：……学校へ出て来てから学級の先生にわけ

→ 言ったんです。

T：ああ、〇〇先生にね。休んだわけを話したの
ね。

C：はい、でもみんながずる休みだっていうんで
す。

T：うーん、ずる休みだと思われていやなんだね。

C：それに二学期から場所かえ（席かえ）するで
しょ。またみんな並ぶのいやがったりして…

T：ああ、M子さんは席かえのことも気になって
いるのね。

C：はい、〇〇さん達と同じ班になるといいんだ
けど。

夏休みという大きなブランクが彼女をまた不安にしている。やはり第三者に問題意識を持つことに変
りがないようである。同じことの繰り返しをまたしななければならない。ここで根負けをしないで彼女の
言い分をじっくりときいてやり、自発的に動けるよう援助しなければならないと思う。

第9回（9月〇日）

T：席かえのことお話して。

C：はじめなかなかきまらなくてね。

T：うんうん。

C：私も誰と並ぶのかなあって思っていたんで
す。

— 略 —

C：〇〇さん達が、私たちの班になろうって言

→ ってくれたんです。

T：そお、〇〇さん達とだったら一緒によかった
？

C：はい、私も、〇〇さん達と同じ班になりたい
って言ったんです。

T：そお、M子さんから言ったのね。それが同じ
になれてよかったわね。

M子の席がきまるまで不安だった気持ち、またM子をとりにく仲間たちの苦慮も感じられる。しかし、
あまりの難もなく過ぎたことを嬉しく思った。

Ⅳ おわりに

Mとの関係は始まったばかりであり、Mにとって単なるぐちを聞いてくれる誰でもいい、他人となら
ないよう努力してきたつもりである。能力的に低い生徒であるだけに、共に喜び、共に苦しんでいる

ときはそれでいいのだが、やがてまたMの知らない側面にぶつかるであろう。そのとき、また共に「会えてよかった」と言える人間関係を作り上げるために努力しようと思う。学校という集団生活の場においていつも感じていたことではあるが、生徒のひとりひとりが満足感、安心感を持って過ごせるのは、学級担任との心よいふれ会いや、仲間との間で存在価値が認められるということではないだろうか。私はM子との出会いによって、より強くこのことが感じられた。最近は「いじめられる」「嫌われている」という言葉の少なくなったMを暖かく見つめて行きたいと思う。